

戦（いくさ）に関わる文字文化と文物の総合的研究

Study of Literature and Culture Related
With War Affairs

遠山 一郎 (TOYAMA ICHIRO)

愛知県立大学・日本文化学部・教授



研究の概要

この研究は、日本において、戦（いくさ）とそれに関わる諸現象が、人の生きかた、社会、文化にどのような影響を与えたかを、人文学のさまざまな分野の学際的研究によって総合的に捉える。戦そのものだけでなく、空間的・時間的にその前後にあることがらを、その記録のしかた、記録させる死生観、その記憶、戦についての人の認識の仕方に及んで解き明かす。

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：戦（いくさ）・歴史・書記・文学・語り・芸能・認識・記憶

1. 研究開始当初の背景

日本には古代から近代まで対外接触が常に見出される。古代では中国、朝鮮との関わり、中世では中国・朝鮮・ヨーロッパとの接触、近代ではアジア、ヨーロッパ、北アメリカとの関わりである。日本列島内においても、古代に中央政権と周辺政権との間の接触があった。それらの接触には心理的・物理的な摩擦が伴っていた。各時代の摩擦に共通する要素の一つが戦である。その全体像を捉えるために、研究対象の領域・時代を異にする研究者が本研究を構成することによって、戦に関わる人の営みの総合的な研究を進めようとした。

2. 研究の目的

この研究は、戦によって技術革新が進み、社会構造や文化が変わるさまを明らかにしながら、戦に際しての人生観あるいは死生観、戦と戦死者に対する記憶、人の認識の仕方が戦前、戦中、戦後で変化する様相等に踏み込んでいく。この解明によって、戦を起こさないための、そして不幸にして起きてしまったとき、少しでも良い方向を得るための手がかりを見出そうとする。この研究によって、戦から解きはなされた人、社会、文化を作りだす手がかりが得られれば、人文系の研究が世に役立つ道の一つを示すことができよう。

3. 研究の方法

具体的な課題として、次の4つを立てる。

①「古代の戦と社会と人」：1世紀ころから記録された日本列島の対外接触と7世紀の白

村江の戦、壬申の内乱と日本列島の律令国家体制と「日本」という国家意識の成立。朝鮮半島からの亡命知識人による文化・技術の革新。東北地方への移民と8世紀の争乱。これらと古代日本の社会と人の意識との関わり方の研究。②「戦を語る表現と言葉」：古代末期の源平の争乱の様相を説話文学、軍記文学、中世・近世の謡曲、お伽草子、寺社縁起等のなかを探る。源平の争乱による社会の変化が古代語を収束させて近代語に変化させたことの研究。③「文化・政治としての戦とその周辺」：戦国期の城郭・城下町の研究。さらに蓬左文庫所蔵本に見られる戦後の世相安定のための文化政策の研究。また、戦国時代の実体験の様式化の研究。ほぼ同じ時代にヨーロッパ諸国において城郭を中心に都市が作られた様相の研究。④「近代の戦争と人の意識、その表出」：近代日本が体験した数度の戦がそれぞれに社会と人の認識の変化をもたらしたことの文学・心理学的研究。

4. これまでの成果

佐々木雄太（愛知県立大学学長）の2つの講演「イギリスの戦争と戦争の記憶」「ワテルローとイギリスの愛国主義」がこの研究の主題にヨーロッパへの広がりを持たせた。丸山裕美子の諸論文は東アジアへの広がりをこの研究企画に取り入れ、佐々木の講演とあいまち、東アジアからヨーロッパに広がる研究対象の視野を定めた。

個々の研究に入って、公開研究集会「七世紀東アジアの戦と国家形成 一唐・新羅・日本

一」は 基調講演: 笹山晴生(東京大学名誉教授)、研究報告: 孟彦弘(中国社会科学院歴史研究所・副研究員)、李相勲(韓国慶北大学校・歴史教育科博士課程在学)、倉本一宏(国際日本文化研究センター教授)の講演によって、7世紀東アジアの歴史と日本との関わりの諸相を解明した。この研究集会を受けて、身崎壽(北海道大学教授)による防人歌についての講演を行い、これらの成果に丸山裕美子、犬飼隆、他3名の論文を加えて、論文集『いくさの歴史と文字文化』を出版した。

やや時代の下がったところで、久富木原玲が未発に終わった薬子の変と平安文学との関わりに解明を加えた。中世文学の分野で、松尾葦江の講演が諸本の語り方の相違の問題、服部幸造の講演が平家物語で実際のいくさが物語に作られてゆくさまに迫った。

源平のいくさが後の芸能などにも大きな影響を及ぼしたことを、国際シンポジウムで究明した。その内容は、知多半島野間大坊に今も伝わる絵解きの実演、ただ1人の平曲盲人伝承者今井検校勉による「奈須与市」の実演(荻野検校顕彰会(代表尾崎正忠)との連携)、日本舞踊「八島」(荻江節)を花柳龍蘭が実演し、平家物語に関わった芸能を視覚的に示し、それをDVDに記録した。それを受けつつ、講演と討論会で Florence Goyet 博士(グルノーブル大学教授)、Francisco Bautista 博士(サラマンカ大学研究教授)、篠田知和基(名大名誉教授)によって、いくさの語り方をヨーロッパ・日本の視点から解明した。これに久富木原玲、中根千絵、小谷成子、宮崎真素美、山口俊雄の諸論文を加えて、韻文・散文における諧謔の視点から近世・近代の様々な文学の営みを論じた論文集『いくさを語る視点—諧謔の文学をめぐる—』を編集した(2010年度早々出版予定、書店決定済)。

平家物語の研究で平曲譜本シンポジウムを企画し、鈴木孝庸(新潟大学教授)、薦田治子(武蔵野音楽大学教授)を迎えて、平曲の語りの今に伝わったことの意義、日本の曲調の作り方、その記録の仕方等の報告と討論とを行った。これに並行して『「平家正節」盲人伝承八句—ライブ映像と検索』を編集し、盲人伝承による平曲の語りと『平家正節』との同時視覚化をDVD化し検索機能を付け、平家物語に関わる論文をあわせて出版した。

歴史地理に視野を広げて、山村亜希の諸研究が日本の戦国・織豊期を通じて、城下町や港町の景観が大きく変化する過程を考察した。いくさを挟んだ日本の都市景観の変化を、同じく戦乱後に景観形成の進んだ中世イングランドを始めとする西欧の中世都市と比較し、日本の戦と都市との関わりを、グローバルな視点から考察した。

近代の文学研究で、山口俊雄が中世・近世の乱世の作品化について、1960年代半ばの政

治的混乱の時期に書かれたことに留意しつつ、過去のいくさへの注視が文学による同時代批評へと道を拓いたことを明らかにした。さらに、宮崎真素美が1930から40年代戦時下における詩人たちの文学活動を研究、これに戦争体験者の記憶のありかたを探って聞き取りを行い、論文および当科研のWEB SITEに公開した。

以上のこれまでの研究によって、古代から近代に及ぶ時代的広がりの中で、いくさをめぐる歴史・書記・文学・芸能の諸分野の研究を総合的に進めた。

5. 今後の計画

- ・『いくさを語る視点—諧謔の文学をめぐる—』の出版。
- ・講演とパネルディスカッション「日本近代文学と戦争—「十五年戦争」期の文学を通じて」講演者: ノーマ・フィールド(シカゴ大学)、坪井秀人(名古屋大学)、米谷匡史(東京外国語大学)、宮崎真素美(愛知県立大学)、山口俊雄(愛知県立大学)を催す。
- ・この成果の論文化とその出版。
- ・徳川美術館および蓬左文庫との連携による文物資料展示・講演会。
- ・名古屋市・半田市等に伝わっているからくり人形芝居の研究。
- ・いくさの影響による古代語から近代語への日本語史研究。

6. これまでの発表論文等

- ・『いくさの歴史と文字文化』三弥井書店、2010年3月
- ・宮崎真素美「〈ふりむかぬ〉者と〈ふりかえる〉者—「海ゆかば」、防人歌から「橋上の人」へ—」、「説林」第58号、2010年3月
- ・『「平家正節」盲人伝承八句—ライブ映像と検索』双光エシックス、2009年3月
- ・丸山裕美子「延喜典薬式『諸国年料雑薬制』の成立と『出雲国風土記』」、「延喜式研究」第25号、2009年3月
- ・山村亜希『中世都市の空間構造』吉川弘文館、2009年
- ・久富木原玲「薬子の変と平安文学—歴史意識をめぐる—」『愛知県立大学文学部論集』2008年3月
- ・山口俊雄「石川淳「鸚鵡石」論—典拠『武辺雑談』との比較—」、「国語と国文学」、第85巻第4号、2008年
- ・宮崎真素美の聞き取り「文字文化は〈命の泉〉—戦時下名古屋の女子教育—: 卒業生 長谷川文子氏に聞く」(当科研WEB SITE)
- ・宮崎真素美「八王子の『蝶』—戦時下の若き詩人たち—」、「国語と国文学」第85巻第1号、2007年
- ・中根千絵「『古今著聞集』編者自身も登場」『国文学解釈と観賞』2007年8月

7. ホームページ等

<http://www.lit.aichi-pu.ac.jp/kb/kibanS07>